

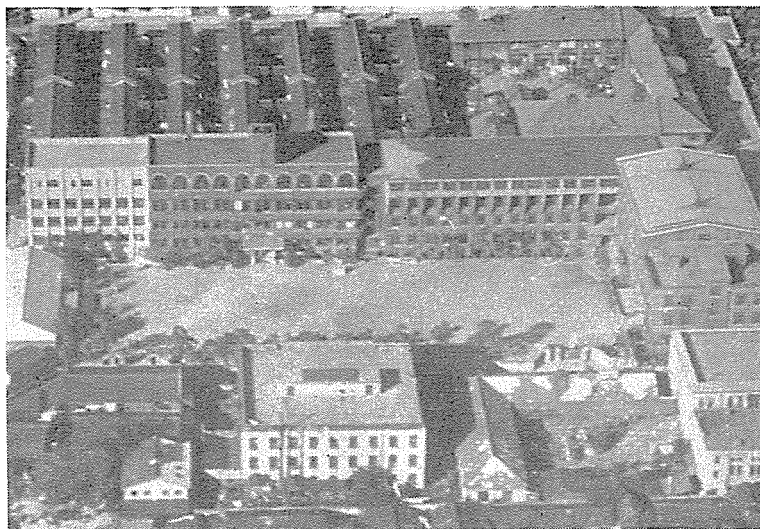
THE KANSAI UNIVERSITY BULLETIN

Osaka, March 30th, 1956. No. 289.

關西大學學報

昭和31年3月 第289号

昭和二十六年十月十五日第三種郵便物認可
昭和三十一年三月三十日発行（毎月一回三十日発行）
通巻第二八九号



空からみた天六学舎

關西大學學報局

昭和三十年度は創立七十周年記念行事等を含めて極めて華かなる一年を終らし、大学関係者の一人としてこの上もない喜びである。

明治十九年十一月四日願宗寺で開校した我が関西大学が注目し得る大飛躍をなしたのも、過去七十年の長い歳月の間、高い理想と希望にもえつゝ理性的感覚と力強く努力しつゝけて来た全関係者の貴い血と汗の結晶であるを想い、私達は最高の敬意と感謝をさぐげたい。

私が経営陣の末席をけがして四年目の新大学年度を迎えるにあたり、今日迄に築き上げられた、この偉容



大学を測定する

矢野 文雄

を見て私は、こゝで我が大学が同じような出発をした他の大学に比して、總ての面に於て遜色なく優れているかどうか。又現理事会になつてからの業績はどうか等を考慮に入れて、客観的な立場に立つて正確に測定すべきだと考えた。

自らを厳正に測定することは次の飛躍への基本方針を樹てる為当然すべきことであり、私が監事と云う職分の上になつて、我が大学の実体を私なりの力で把握し測定することは、私に課せられた仕事の一つだと考えてもよいと思うからである。

さて大学を測定する目標はあくまで大学の「発展」

と云うことである。大学の測定は色々な角度から行われるであろうが、一番通俗的なものは物的施設の進歩の度合である。

これは大学発展を測定する一つの、また最も普通に行われるケースである。私が昭和三年から昭和九年迄千里山で学んだ当時と現在の母校の現況とでは、夢の様なへだたりのあることが判る。この点母校は大きな飛躍をした事が測定されるといつてよい。

然し、右の如き物的施設の発展の測定よりも、もつともつと重要なものは、大学のクラスルーム、演習室、或は図書館、其他研究室に於て、教授と学生とを主体

に、役員、事務者、校友等とによつて作り上げられている、研究と教育との機関としての大学の成果が、それ以上にすばらしく発展しているかどうかと云う事である。我が大学の大学精神が、大学の正門から象牙の塔に至る迄瀾漫高揚されている実体を測定することが重要なのである。「大学の測定」が目暗すべき第一の目標はこゝに置かるべきではなからうか。

大学の測定は全体的に見る場合と部分的に見る場合の二つがある。いま、前者の場合について些か私見を述べてみたが、更に後者、即ち部分的に見る場合について考えてみよう。

大学発展の為に大学測定が必要だと云う私の考えでは、更に各ポストにある人々が自己測定をすることが大学発展の為の喫緊事の一つだと考える。即ち大学行政家は現在の大学経営方式が現有せる大学の力と将来への大計とのらみ合せに於て適正なりや否や、大学教授は深く高い学問の世界に精進されている自らの姿を、事務者は各々の仕事の分野に於て最高度に能率が高められているかどうか、学生は学園の内外において大学学生としての誇りと理想に日々の生活を有意義に過しつゝあるかどうか、校友は大学の隆盛のためどんな風に、例えば財政的、また学問的教育的に、貢献して来たか、を自ら測定する事である。

かくの如く我が大学を構成せる人々が虚心坦懐に自己測定をして、更に大学進展の為に、おしみなく全力をあげて努力する限り輝しい発展は更に更に立派な実を結んで行くことは明らかな事である。

この測定と云うことについては種々異論もあり御批判もあらうかとおもわれるが、私の意図し希望するところが那邊にあるかをよく御理解願いたい。来る昭和三十一年計年度は、前年度に較べて更に大きな発展を遂げ、そのよりよき成果が測定され得るよう、切望しているのである。

あれを想い、これを想いつゝ筆をとめ、大学ホールから図書館を眺めた時、静かなる鐘の音が鳴り初め、大学の前途を祝福するが如く、また大学をおう歌するが如く、千里丘陵の上をゆるやかに流れていった。

(千里山役員室にて 常務監事)

土屋文明氏とその萬葉集私注

吉 永 登

土屋文明氏を萬葉学の素人だなどというのと、すでに大著萬葉集私注を十八冊まで世に送つて、そのゆえに賞まで授けられている氏は憤慨せられるにちがいない。氏はともかくとして氏の崇拜者から、きついお叱りを受けること必定であらう。しかし、素人だといつたからとて、何も萬葉学者として一流でないといつたりなど毛頭ないのである。氏はアララギ派の重鎮として第一等の歌人なのであるから、この道一筋の所謂専門家に対して、かりに素人と呼ばせていただいたまでである。

氏の萬葉集私注のすぐれていることは今更らしくいうこともないのであるが、とにかく人間というものは身近かなものでないと納得のゆかぬものであるらしい。私も御多聞に洩れず苦勞してやつと考へついた説が、氏の私注にもいつているのを見つけたら、その真価を知らなかつたともいえるようである。

萬葉集の卷二に、大伴旅人の父、家持には祖父にあたる安磨から巨勢郎女に贈つた

玉かつら実ならぬ木にはちはやぶる神ぞ
つくとふならぬ木ごとに

という歌がある。この歌を通説では「実のならない木には、どの木にもすべて変な神がつくということです。だから貴女も早く身を堅めたらどんなものです。でないと魔がさしますよ」と解している。

ところで、私にはどうしてもこの解釈がふに落ちなかつたのである。常識からも、神がすでにについている

から実がならないということは考えられても、実がならないと神がつくということは理窟に合わないようであり、又裏の意味にしても、女がいつまでも独身でいる（子供を生まぬ）のは神と結婚しているからだといふことならわかるのであるが、いつまでも一人である虫がつくの虫を神にすりかえたような考え方はおかしいからである。その頃偶然よんだ源氏物語に次のような話があつた。即ち、宇治の八宮の遣兒大君は薫大將の結婚の申入れに一向耳を借そうとはしない。願つてもない縁談であるだけに、大君周囲の女房達は気がついてゐるのではあるまいかと噂し合うという話である。これに力を得て、「つくとふ」が語法からも、著いてゐると解し得ることなどを考へ合せて得た結論が、「……実のならない木にはすでに神がついてゐるというように、いつまでも結婚しようとならない女は神と結婚しているからだといふことです。それが心外なら私と結婚して無実であることを明かなさつては」という解であつた。私としてはいささか得意であつただけに、

後に私注ではほぼ同じ解を見た時の驚きはいうまでもない。多少とも早かつたことをせめてもの慰めにしても、私注恐るべしの感に打たれたことは事実である。もつとも、最初に敢て氏を素人呼ばわりをした背後には私なりの云い分がないわけでもない。というのは私注にも徒然草にいう堪能の非家らしい、専門家ならしないはずのミスが時々あるからである。

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち

この丘に 葉摘ます兒 家吉、閑名告沙根、そらみつ 大和の国は おしなべて 吾こそ居れ。しきなべて 吾こそませこそは告らめ 家をも名をもの傍点をつけた第七と第八の二句を、私注は真淵の萬葉考に従つて「家吉、閑名告らさね」と訓んでいる、

この二句は従来「家吉、閑名告らさね」と訓まれていたものを、亀井孝氏が、「閑」をカナと訓むことは無理だとして「家吉、閑名告らさね」の訓みを主張したものである。この亀井氏の訓みは、その後専門家の認めるところとなつてはいるが、実をいうと私には末句の「家をも名をも」に照応するものとしては、素朴に「家……名告らさね」とあつてほしいと思つてゐた。それだけに、私注の「家告らへ、名のらさね」の訓みが、果して亀井氏の説を意識したものかどうかは知る由もないが、さすが歌人らしい直感だと私を喜ばせたものである。しかし考へてみるとこの私注の訓みには大きな誤りがあるのである。上代にはへをも含めて十三の仮名には二通りの音があつて、互に通じて用いられないことになつてゐる。この事実は橋本進吉博士によつて確かめられたものであるが、どうやら母音の相違にあるらしい。これを上代特殊仮遣といつてゐるが、何れにしても「告らへ」の場合「閑」系統の仮名は用いられないことになるものである。つまり「告らへ」の「へ」と「閑」とは発音がちがつたものである。ことの序に私に意見をいうならば、私は「家吉、閑名 々告沙根」とあつた踊り字が落ちたものと考えて、やはり「家吉、閑名 告らさね」の訓みを生かしたいと考へてゐる。

ともあれ、近く全巻の注釈を完成しようとする氏に、依然としてこのような誤りがあるとは思われないが、古典の解釈に完璧を期することの困難はこの一事でも明かなのはなからうか。一生精進が要請せられる所以である。（文学部教授）

近代歌人による萬葉集研究の文献目録(二)

谷 澤 永 一

萬葉清話

靖文社 昭一七五

萬葉集神事語彙解

有精堂出版部 昭一七五

(今井福次郎と共著)

正訓萬葉集

八雲書院 昭一九六

萬葉五十年

八雲書院 昭一九六

萬葉集より

昭二二四

統萬葉集より

昭二二六

萬葉年表大成

養徳社 昭二二五

萬葉手鑑

京部印書館 昭二二七

萬葉集を読まうとする人に

昭二三四

評釈萬葉百首選

好學社 昭二三五

評釈萬葉集 佐佐木信綱全集

六興出版社 昭二四一

第一 昭二二二

第二 昭二四一

第三 昭二五三

第四 昭二六五

第五 昭二七四

参考

余情 第8集 佐佐木信綱研究 昭二三六

久松潜一 佐佐木信綱と萬葉集研究 萬葉集大成

2 文獻篇 (平凡社 昭二八八)

釈 迢 空

歌歴

明治三十四年文庫服部躬治選歌欄投稿。四十三年根岸短歌会参加、アラギ同人。大正十年頃よりアラギから遠ざかり、十三年日光同人。国学院の学生グループの白鳥・くぐひ・鳥船を指導したが、それ以外の結社雑誌には昭和二十八年九月死去する迄関係しなかつた。歌集・海山のあひだ・春のことぶれ・天地に宣る・山の端・水の上・遠

やまひこ・倭をぐな。

著書 (署名は折口信夫)

萬葉集 国文口訳叢書第3篇 文芸堂書店

上大五 中大六 下大六 全集才4巻及び才5巻

萬葉集辞典 文芸堂書店 大八

古代研究 国文学篇 大岡山書店昭四四 全集才1巻

萬葉集総釈第七 漢書院昭一一七

(このうち卷十四の全註釈担当)

恋の座 和木書店 昭二四二

萬葉講義歌傍飛鳥篇 推古書院 昭二四六

日本古代抒情詩集 世界名詩選 河出書房昭二八〇

折口信夫全集 中央公論社

第七卷国文学篇1 昭三〇五

第八卷国文学篇2 昭三〇一〇

第九卷国文学篇3 昭三〇一二

参考

三田文学 折口信夫追悼号 昭二八二

高崎正秀 折口先生と萬葉集 万葉集大成月報 才6号

澤瀉久孝 口訳萬葉集の生命 折口信夫全集月報才14号

池田弥三郎 折口先生の学問 文学昭三〇一一

新 村 出

歌歴

歌集・重山集・牡丹の園・その他。

著書

萬葉集総釈第三 漢書院 昭一〇七

(このうち卷六の全註釈担当)

萬葉図録文獻篇地理篇 靖文社 昭一五一一

(佐佐木信綱と共著)

萬葉苑枯葉 生活社 昭二三二

宗 不 早

歌歴

窪田空穂を中心とする十月会参加、のちあけび加入。昭和十七年行方不明。歌集・つくまなべ・荔枝。

著書

柿本人麿歌集 新釈和歌叢書第6編

紅玉堂書店 大一一四一

鑑賞柿本人麿歌集 素人社書屋 昭八四

(前記同一内容改題)

谷

歌歴

大正十三年霸王樹入社。昭和三年槻の木入会。十四年和歌文学創刊、二十四年朝鳥と改題。歌集・年輪・妙高・青雲。

著書

大伴家持・高橋蟲麿 作者別萬葉集評釈全集第5

卷 非凡閣 昭一一三

(大伴家持篇担当)

歴代名歌評釈記紀萬葉篇 交蘭社 昭一一二

山上憶良・山部赤人 歴代歌人研究第2巻

厚生閣昭一三八

(森本治吉と共著)

短歌の精神 和歌文学叢書第3篇 非凡閣 昭一八五

和歌文学論攷 非凡閣 昭二二七

谷

歌歴

大正三年七月頃国民文学社入社、国民文学第二号より社友。歌集・伏流。

著書

詳解萬葉集選 芳文堂 昭七

土田

歌歴

大正十一年以降、露台・郷愁・芸術と自由・短歌建設などに短歌発表。昭和九年四月死去。

著書

国文学の哲學的研究 オ一書房

第二卷文学の發生昭三10 第三卷上代の歌謡昭四6
文学と感情 オ一書房 昭八3

都筑 省吾

歌歴

地上・国歌・白鷺に参加。根の木編集。歌集・夜

風。

著書

大伴家持・高橋蟲磨 作者別萬葉集評釈全集第5

卷 非凡閣 昭一13
(高橋蟲磨篇担当)

土岐 善麿

歌歴

明治三十七年頃より金子薫園に師事。生活と芸術

・日光などに参加。以後結社に所属しなかつた。

歌集・NAKIWARAI・黄昏に・不平なく・佇みて

・街上不平・雑音の中・緑の地平・緑の斜面・初

夏作品・土岐善麿新歌集作品1・土岐善麿新歌集

作品2近詠・六月・周辺・秋晴・夏草・冬風・春

野・遠隣集・早稲田抄。

著書

作者別萬葉短歌全集 東雲堂書店 六四11

作者別萬葉全集 アルス 六一9

改題文庫才二部101 改題社 昭六6

歌話 一燈書房 昭二四2

参考

古泉千樞 土岐哀果編萬葉集短歌全集に就て

随録抄(改題社 昭五3) 收録

余情 第7集 土岐善麿研究 昭三6

中河 与一

歌歴

大正十一年村野次郎が創刊した香蘭同人。昭和初

頭ごぎやう歌会参加。

著書

萬葉の精神 千倉書房昭一二7 定本版国民社 昭一七6

服部 躬治

歌歴

明治二十六年あさか社参加。三十一年六月いかづ

ち会を起す。三十二年一月文庫和歌欄選者。大正

十四年三月死去。歌集・廻具土・あまびこ集第一

集・あまびこ集第二集。

著書

恋愛詩評釈 明治書院 明三11

参考

年譜・遺作集成 水廻 昭一二1及び2

伊藤左千夫 今の所謂新派の歌を排す 左千夫歌

論集卷一 澤瀉久孝 二人ありとし思はば 萬葉古徑

澤瀉久孝 二人ありとし思はば 萬葉古徑

日比野道男

歌歴

尾山篤二郎の自然同人。

著書

萬葉地理研究紀伊篇 萬葉地理研究叢書第三編

藤井 春洋 ↓折口春洋を見よ。 白帝書房 昭六6

松村 英一

歌歴

窪田空穂に師事、十月会結成。国民文学主宰。歌

集・春かへる日に・やますげ・露原・山の井。

著書

代匠記・考 萬葉集上巻 紅玉堂書店 六一三11

短歌論鈔 国民文学叢書第8篇 紅玉堂書店 昭二1

絵解新訳萬葉集上巻 大洋社出版部 昭四9

新訂萬葉集 紅玉堂書店 昭四9

築瀬 一雄

歌歴

沃野同人。

著書

学生の為めの萬葉集の鑑賞 興文閣書房 昭一三10

改訂増補萬葉集の鑑賞 荻原星文館 昭二三7

吉澤 義則

歌歴

明治三十二年若菜会参加。昭和五年六月より二十

九年十一月死去する迄澤木主宰。歌集・やまな

み。

著書

国語国文の研究

岩波書店昭二4

国語説鈴

立命館出版部 昭六9

萬葉集総釈第二

楽浪書院 昭一〇11

(このうち卷三の全註釈担当)

大和魂と萬葉歌人

平凡社 昭一四5

参考

国語国文 特輯吉澤博士追悼号 昭三〇11

吉原 敏雄

歌歴

銀杏短歌会・真人などに所属。昭和二十一年碧落

創刊、三十年十月死去するまで主宰。

歌集・柚子の木。

著書

萬葉集詳解 山海堂

参考

碧落 吉原敏雄先生追悼号 昭三一1

第二部 年代順目録

明治

二四10 佐佐木信綱 日本歌学全書萬葉集上巻

三三11 服部躬治 恋愛詩評釈

三五12 正岡子規 子規随筆続篇

三六? 森田義郎 萬葉集私刪上巻

四一9 佐佐木信綱 歌学論叢

四二3 佐佐木信綱 日本歌選第一編上古の巻

四三8 森田義郎 萬葉長歌評釈

四四4 森田義郎 萬葉短歌評釈

四五5 佐佐木信綱 萬葉集古写本攷

大正

四? 井上通泰 萬葉集新考私刊本第一冊

四? 窪田空穂 萬葉集選

四 9	窪田空穂	続萬葉集選	四 4	吉澤義則	國語國文の研究	一〇 5	上田英夫	改訂萬葉集新選
四 11	土岐善麿	作者別萬葉短歌全集	9	佐佐木信綱	新訓萬葉集上巻	5	武田祐吉・土屋文明	萬葉集総釈第一
五 9	折口信夫	口訳萬葉集上	2	佐佐木信綱	萬葉学叢刊中世篇	6	斎藤劉	萬葉名歌鑑賞
11	尾山篤二郎	柿本人麿	4	兒山信一	新抄萬葉集	7	森本治吉・新村出	萬葉集総釈第三
12	佐佐木信綱	萬葉集選釈	9	花田比露思	萬葉集私解	7	佐佐木信綱	国文学の文獻学的研究
12	兒山信一	新採百首解山常百首	10	土田杏村	国文学の哲學的研究第二巻文学の発生	9	窪田空穂・藤森朋夫	萬葉集総釈第四
六 1	尾山篤二郎	旅人他六歌仙	四 4	斎藤茂吉	短歌写生の説	10	窪田空穂	柿本人麿鴨山考補註篇
3	尾山篤二郎	萬葉集物語	4	折口信夫	古代研究国文学篇	10	佐佐木信綱	大日本文庫萬葉集上巻
4	窪田空穂	萬葉集選	6	土田杏村	国文学の哲學的研究第三巻上代の歌謡	11	金子元臣	萬葉集評釈第一冊
八 1	折口信夫	萬葉集辞典	8	兒山信一	上代歌謡集	11	窪田空穂	柿本人麿
九 1	斎藤茂吉	童馬漫語	9	伊藤左千夫	左千夫歌論集卷一	11	佐佐木信綱	萬葉説本
十 9	佐佐木信綱	評釈ボケツト萬葉集	9	松村英一	新訂萬葉集	12	吉澤義則・石井庄司	萬葉集総釈第二
十 9	太田水穂	短歌立言	9	島木赤彦	赤彦全集第三巻	12	高木市之助・今井邦子	萬葉集総釈第八
一 4	窪田空穂	萬葉集新選	四 11	井上通泰	南天莊雜筆	12	尾山篤二郎	大伴家持・山上憶良
一 4	島木赤彦	萬葉集燈	五 2	古泉千樫	隨縁抄	12	尾山篤二郎	作歌道雜話
二 2	島木赤彦	萬葉集俳案抄	3	佐佐木信綱	白文萬葉集上巻	二 2	佐佐木信綱	萬葉集総釈第九
九 9	土岐善麿	作者別萬葉全集	3	佐佐木信綱	分類萬葉集	2	佐佐木信綱	山部赤人・高市黒人・笠金村
一 三 5	島木赤彦	歌道小見	9	日比野道男	萬葉地理研究紀伊篇	3	川田順・安藤正次	萬葉集総釈第五
9	正岡子規	子規全集第五巻	六 6	吉澤義則	國語説鈴	3	窪田空穂・谷馨・都筑省吾	大伴家持・高橋蟲麿
11	松村英一	代匠記・考萬葉集上巻	9	土屋文明	萬葉集年表	4	川田順	女流歌人
12	佐佐木信綱	校本萬葉集和綴本第一冊	七 4	澤瀉久孝・森本治吉共篇	作者類別萬葉集	7	斎藤清南・折口信夫	萬葉集総釈第七
一四 1	宗不旱	柿本人麿集	5	井上通泰	萬葉集雜考	12	谷馨	歴代名歌評釈記萬葉篇
6	橋田東声	傑作選萬葉集評釈	11	佐佐木信綱	萬葉集概説	二 4	小泉孝三	萬葉集新抄
8	橋田東声	萬葉女流歌人歌集	11	谷鼎	詳解萬葉集選	5	斎藤茂吉	柿本人麿評釈篇卷之上
10	廣野三郎・藤澤古夷	萬葉集全巻	11	土田杏村	文学と感情	5	佐佐木信綱	萬葉集百話
11	島木赤彦	萬葉集の鑑賞及び其批評	8	宗不旱	鑑賞柿本人麿歌集	7	中河與一	萬葉の精神
一五 4	尾山篤二郎	山上憶良歌集	4	斎藤茂吉	新選秀歌百首	8	藤井春洋	東歌・大伴家説本
5	小泉孝三	評釈大伴家持全集	5	高田浪吉	萬葉集鑑賞卷第一	10	中村憲吉全集第二巻	萬葉集追放
7	佐佐木信綱	仙覺全集	8	佐佐木信綱	正訓萬葉集	一三 3	森本治吉・谷馨	山上憶良・山部赤人
7	佐佐木信綱	秘府本萬葉集抄	九 1	藤森朋夫	萬葉集新選	10	築瀬一雄	學生の爲めの萬葉集の鑑賞
8	尾山篤二郎	道厓宜長萬葉集問答	2	斎藤茂吉	柿本人麿総論篇	11	斎藤茂吉	萬葉秀歌上巻
8	尾山篤二郎	萬葉集微	11	土屋文明	萬葉集名歌評釈	一四 2	斎藤茂吉	柿本人麿評釈篇卷之下
12	長塚節	長塚節全集第四巻						
昭和 二 1	佐佐木信綱	抄釈袖珍萬葉集						
1	佐佐木信綱	萬葉漫筆						

5	佐佐木信綱	大伴旅人・大伴家持	6	阿倍次郎・澤瀉久孝・土屋文明・花田比露思・	二三1	加藤順三	萬葉美論
5	吉澤義則	大和魂と萬葉歌人	6	小畑蕭良 萬葉集について	2	新村出	萬葉苑枯葉
5	谷馨	短歌の精神	6	正宗敦夫・森本治吉共編 萬葉集大辞典了行	4	佐佐木信綱	萬葉集を讀まうとする人に
一五2	佐佐木信綱・武田祐吉	定本萬葉集一	6	窪田空穂 萬葉集評釈第一卷	5	佐佐木信綱	評釈萬葉百首選
6	今井邦子	萬葉読本	7	土屋文明 萬葉集私見	5	尾上榮舟	萬葉百首選
11	佐佐木信綱・新村出	萬葉圖録文獻篇地理篇	7	森本治吉 萬葉集の精神と釈義	7	佐佐木信綱	萬葉集の研究第三萬葉集類歌類句
12	斎藤茂吉	柿本人麿雜纂篇	9	森本治吉 萬葉のうた	11	佐佐木信綱	評釈萬葉集第一
一六2	中島光風・藤森朋夫	萬葉集新選	11	森本治吉 人麿の世界	12	尾山篤二郎	大伴家持の研究上
3	森本治吉	萬葉に生くる者	12	土屋文明 萬葉紀行	二四2	折口信夫	恋の座
4	斎藤茂吉	沙石	12	伍藤信綱 萬葉集の詩精神と文化	2	土岐善麿	歌話
4	森本治吉	萬葉集の芸術性	一九3	橋本徳寿 萬葉集釋記	5	土屋文明	萬葉集私注第一卷
4	森本治吉	萬葉集新見	3	森本治吉 符号本萬葉集上卷	6	森本治吉	萬葉美の展開
6	土屋文明	萬葉集小径	3	井上通泰選井上三綱画 萬葉画集	6	折口信夫	萬葉講義歟傍飛鳥篇
8	佐佐木信綱	萬葉辞典	3	佐佐木信綱 萬葉集の研究第二萬葉集古写本の研究	6	土屋文明	萬葉集の話
11	川田順	評釈日本歌集	6	佐佐木信綱 萬葉五十年	二六9	土屋文明	萬葉集入門
一七2	佐佐木信綱	萬葉集の研究仙覺及び仙覺以前の	7	斎藤茂吉 童馬山房夜話第一	二七3	土屋文明	新修萬葉紀行
3	窪田空穂	小国民選書萬葉集	9	土屋文明 萬葉集上野国歌私注	12	窪田空穂	古典文学論
4	森本治吉	萬葉集精粹の鑑賞上卷	二〇4	斎藤茂吉 文学直路	二八5	藤森朋夫	新註萬葉集
4	佐佐木信綱	今井福次郎 萬葉集防人歌の鑑賞	二二4	佐佐木信綱 萬葉集より	8	斎藤茂吉全集第二十一卷	
4	佐佐木信綱	山上憶良	6	佐佐木信綱 統萬集集より	10	折口信夫	日本古代抒情詩集
5	土屋文明	旅人と憶良	二二9	土屋文明 統萬集紀行	二九3	太田水穂	日本和歌史論上代篇
5	森本治吉	高橋蟲麿呂	12	森本治吉 日本文学大成萬葉集	9	斎藤茂吉全集第三十七卷	
5	窪田空穂	柿本人麿	二二4	斎藤茂吉 萬葉の歌境	9	土屋文明	鑑賞世界名詩選萬葉集
5	斎藤劉	萬葉のこゝろ	5	佐佐木信綱 萬葉年表大成	12	斎藤茂吉全集第三十八卷	
5	佐佐木信綱	萬葉清話	7	斎藤茂吉 童牛漫語	三〇2	斎藤茂吉全集第四十一卷	
5	佐佐木信綱・今井福次郎	萬葉集神事語彙解	7	佐佐木信綱 萬葉手鑑	5	折口信夫全集第七卷	
6	斎藤劉	防人の歌	7	谷馨 和歌文学論攷	10	折口信夫全集第八卷	
9	五味保義	萬葉集作家の系列	9	森本治吉 日本詩歌の囀	12	折口信夫全集第九卷	
12	窪田空穂	防人の歌	12	森本治吉解説・佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司			
一八5	森本治吉	現代訳日本古典萬葉集		校註 日本古典全書萬葉集(一)			

學 内 報

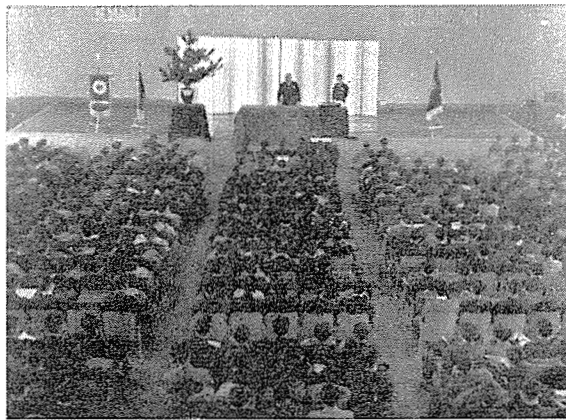
定例評議員会

定例評議員会は、三月二十二日(木)午後三時より天六学舎で開催され、昭和三十一年度学校法人関西大学歳入出予算承認に関する件その他につき審議した。出席者左の通り(敬称略・イロハ順)

中務平吉 樫本信雄 岩崎卯一 岩本公夫 今井康兼 今西庄次郎 池田信之助 春原源太郎 西尾専太郎 西村治三郎 西山四郎 西本寛一 戸根泰雄 大月伸 大小島真二 大島武夫 和田豊二 脇野徳三郎 桂忠雄 神宅賀寿恵 神屋敷民藏 寒川喜一 高垣善一 武田藏之助 竹沢喜代治 内藤正剛 中谷敬寿 長柄金吾 村尾静明 矢野文雄 矢口家治 保井剛一 松原藤由 政井武 近藤政士 江里口春志 阿部甚吉 明石三郎 澤村栄治 木村健助 水谷揆一 宮島綱男 三島律夫 白川朋吉 下条小野右衛門 平井三朗 久井忠雄 久松慶治 森寛紹 森川太郎 関豊馬 角田好太郎

才三十三回学士證書授与式

関西大学第三十三回学士證書授与式は三月二十日に、法学部、文学部が午前十時より、経済学部、商学部が午後二時より千里山学舎講堂で、学歌、証書授与、学長訓示、文部大臣その他来賓祝辞、学友会賞授与、学友会功労者賞状並賞品授与等の式次第で行われた。



学士証書授与式場

三月十九日(月)午後二時大阪駅発、神戸港よりフランス船ヴェトナム号にて欧州へ出発した。なお同教授は、国際法の研究並びに関係学会視察のためドイツ、イギリス、アメリカ等に向う予定。

昭和三十一年度

在外研究員決定

昭和三十一年度在外研究員は選考の結果、三月八日理事会において左の三教授に決定された。

在外視察研究員	文学部	高橋 盛孝
在外学術研究員	商学部	植野 郁太
在外学術研究員	経済学部	杉原 四郎

なお、滞留期間は、視察研究員六ヶ月、学術研究員は一ケ年である。



大阪駅頭の川上教授

千里山才三学舎新築地鎮祭

千里山第二学舎南裏高台地に新しく建設される第三学舎の地鎮祭は、三月十五日(木)午前十時より同敷地で、白川理事長、岩崎学長など本学役員、各学部長、教授等列席し、厳かに行われた。なお同学舎は完成後鉄骨鉄筋コンクリート三階建て、南側に七階建ての研究室が聳え、その瀟洒な偉容は千里山学園に一段の光彩を加えるであろう。



地 鎮 祭

感謝録

別項記載の通り、母校創立七十周年記念拡充資金寄附を募集致しました処、その趣旨に御賛同下さいまして陸続左記の通り御寄附をいただきました。三月三日迄に拝受しました御寄附者の芳名を爰に録し謹んで感謝の意を表します。

昭和三十一年三月

学校法人 關西大學

關西大學七十周年記念

拡充資金寄附者芳名(十九)

昭和三十一年三月三日現在(順序不同、敬称略)

一、校友の部

1 地方支部

奈良支部

金参千円也

金貳千円也

金壹千円也

計金六千円也

累計金五万貳千円也

計金六千円也

地方支部累計

金参百八拾壹万六千円也

2 職域会の部

大阪府庁秀麗会

金参拾参万壹千参百円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

金壹万円也

溝 辺 文 和

吉 田 孝 雄

名 田 京 一

金壹万円也

金壹万円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

金壹千円也

頼 戸 勇 (大13 専前)

今 井 憲 夫 (昭6 大法)

磯 村 八 郎 (昭8 専法)

大 川 三 三 (昭8 大法)

三 好 一 夫 (昭10 大法)

中 井 保 (昭11 専経)

奥 川 武 郎 (昭6 大法)

谷 崎 虎 雄 (昭6 大法)

三 栖 龍 一 (昭5 大法)

平 山 義 明 (昭5 大法)

木 田 幾 行 衛 門 (昭8 大法)

植 村 信 三 (昭3 専法)

安 川 勝 太 郎 (昭9 大経)

藤 崎 民 次 郎 (昭9 専商)

篠 原 昭 三 (昭25 学政)

也 増 田 一 雄 (昭7 専経)

藤 田 令 允 (昭9 専法)

山 田 忠 雄 (大15 開甲)

高 崎 安 太 郎 (大6 専法)

三 好 恒 雄 (昭12 大法)

今 井 永 二 (昭14 専法)

田 辺 卓 起 (昭8 大法)

杉 本 一 雄 (昭10 二商)

岡 野 繁 (昭27 短大)

垂 井 安 三 郎 (昭20 二国)

山 口 英 雄 (昭13 専商)

横 田 八 郎 兵 衛 (昭13 専商)

山 田 敏 一 (昭9 専法)

前 田 敏 政 (昭6 開甲)

寺 井 清 次 (昭11 大法)

山 本 博 通 (昭15 大法)

田 中 巧 (昭9 大法)

平 田 義 一 (昭10 専法)

芝 野 淳 (昭15 大経)

山 本 弘 吉 (昭15 大商)

橋 本 正 (昭12 専商)

原 良 人 (昭7 大法)

深 尾 弘 (昭16 大政)

長 谷 川 誠 治 (昭8 大商)

中 村 忠 一 (昭25 学法)

松 田 保 (昭25 学法)

浅 海 博 (昭27 学法)

岡 本 皓 司 (昭27 学法)

西 田 保 雄 (昭29 学法)

菅 川 忠 雄 (昭15 専商)

森 本 清 司 (昭23 専経)

松 本 純 孝 (昭17 専経)

石 原 久 弘 (昭25 学法)

山 田 豊 (昭18 専経)

中 尾 茂 雄 (大6 専法)

岸 本 倫 太 郎 (昭27 学法)

向 井 久 人 (昭27 学法)

古 川 亀 雄 (大11 専法)

松 浦 仁 一 郎 (昭16 専経)

矢 船 正 夫 (昭25 学法)

橋 本 光 三 (昭25 学法)

米 田 五 一 (昭28 短大)

金 森 幸 男 (昭27 学法)

山 本 一 郎 (昭19 大経)

高 河 原 利 壽 (昭22 専法)

藤 本 不 二 夫 (昭10 大法)

横 山 清 美 (昭25 学経)

福 田 一 夫 (昭25 学政)

杉 山 弘 (昭28 学政)

岡 博 邦 (昭22 大経)

寺 岡 正 義 (昭19 専経)

森 本 信 親 (昭14 専商)

内 藤 竹 彦 (昭25 学経)

安 達 武 敏 (昭25 学経)

米 田 昂 (昭27 短大)

合 田 勉 (昭29 学法)

巽 謙 二 (昭8 専法)

榎 原 孝 雄 (昭25 専法)

杉 本 信 一 (昭21 学法)

宮 前 才 一 郎 (昭15 二商)

山 本 忠 治 (昭11 専法)

村 越 英 男 (昭16 専経)

上 田 万 年 (昭25 学法)

村 上 樹 太 郎 (昭25 学商)

橋 田 悟 (昭26 学商)

茶 野 忠 雄 (昭28 学商)

六 田 正 治 (昭25 専法)

松 田 周 治 (昭8 専法)

川 中 米 太 郎 (昭25 学法)

三 木 森 一 (昭23 専法)

富 次 榮 厚 (昭28 学商)

喜 多 省 三 郎 (昭8 大法)

沢 野 松 太 郎 (昭4 専法)

池 本 進 (昭15 大法)

菅 森 盛 孝 (昭24 高)

森 井 嘉 弘 (昭28 学経)

杉 本 英 和 (昭7 学経)

北 村 正 勝 (昭13 専経)

大 喜 多 勉 (昭15 専経)

井 上 恭 夫 (昭25 学法)

金壹千円也	小池 清 (昭16 大法)	金壹千円也	山下 明 (昭16 大商)
金壹千円也	中西 康裕 (昭29 学経)	金壹千円也	加藤剛一郎 (昭19 大経)
金壹千円也	高橋 昌之 (昭29 短大)	金壹千円也	中小路 勇 (昭27 学法)
金壹千円也	花原 久男 (昭12 二商)	金壹千円也	中村孝太郎 (昭26 学経)
金壹千円也	植田 宏 (昭18 専経)	金壹千円也	坂口 茂見 (昭2 専法)
金壹千円也	広崎 勝美 (昭29 学経)	金壹千円也	辻本 豊七 (昭9 専経)
金壹千円也	田中 博 (昭28 学経)	金壹千円也	田中 清 (昭6 専法)
金壹千円也	松田 鉦彌 (昭12 二商)	金壹千円也	須田 正之 (昭6 専経)
金壹千円也	稲木 裕 (昭14 専法)	金壹千円也	齋藤義嘉壽 (昭26 専法)
金壹千円也	池田 忠雄 (昭13 大法)	金壹千円也	中野 道正 (昭26 学政)
金壹千円也	池堂 弘 (昭15 関甲)	金壹千円也	岡 悦三 (昭11 専法)
金壹千円也	平光 徳松 (昭7 専商)	金壹千円也	八木 俊三 (昭25 学経)
金壹千円也	滝川 芳男 (昭9 大法)	金壹千円也	南木 榮久 (昭26 学経)
金壹千円也	岸田 勳 (昭27 学経)	金壹千円也	佐野日出雄 (昭25 学経)
金壹千円也	吉原新太郎 (昭26 専法)	金壹千円也	小橋 久男 (昭3 専商)
金壹千円也	浅野 敬治 (昭9 大法)	金壹千円也	山森 茂 (昭20 専経)
金壹千円也	中村 平治 (昭26 学法)	金壹千円也	正塚 仁康 (昭7 大法)
金壹千円也	中村 昌平 (昭27 学法)	金壹千円也	石川 寅一 (大7 関甲)
金壹千円也	辻本 重雄 (昭11 大法)	金壹千円也	福田 順一 (昭23 学法)
金壹千円也	丸山 周作 (昭27 学法)	金壹千円也	井上 光雄 (昭25 学経)
金壹千円也	尼子 昌作 (昭26 学経)	金壹千円也	大浦 善雄 (昭26 学法)
金壹千円也	田中 昌美 (昭26 専経)	金壹千円也	村上 良藏 (昭10 専法)
金壹千円也	曾根 孝 (昭28 学法)	金壹千円也	立石 晴男 (昭7 大経)
金壹千円也	中塚 良夫 (昭19 専商)	金壹千円也	永井 嘉郎 (昭26 学法)
金壹千円也	樋口 輝雄 (昭26 学法)	金壹千円也	苗代 豊 (昭24 専商)
金壹千円也	山下 隆 (昭28 学政)	金壹千円也	桜井 守 (昭28 学法)
金壹千円也	井上 正吉 (大6 関甲)	金壹千円也	森山 哲雄 (昭25 学法)
金壹千円也	中島 忠典 (昭6 関甲)	金壹千円也	井上 貞雄 (昭13 専法)
金壹千円也	田口 頼賢 (昭14 大法)	金壹千円也	茨木 英吉 (昭18 専法)
金壹千円也	竹村 盛一 (昭27 院)	金壹千円也	浜 直明 (昭19 大経)
金壹千円也	田中 源吾 (昭10 大法)	金壹千円也	熊田 忠雄 (昭27 学法)
金壹千円也	前田 俊一 (昭10 専商)	金壹千円也	原 秋壽 (昭14 専法)
金壹千円也	森田 新吉 (大7 専法)	金壹千円也	鯨島 旭 (昭18 専法)
金壹千円也	岡田 正治 (昭12 専法)	金壹千円也	北折斗 志泰 (昭20 専経)
金壹千円也	松野 圭三 (昭27 学法)	金壹千円也	仲谷 繁男 (昭24 専商)
金壹千円也	森田 正一 (昭26 学法)	金壹千円也	米田 久昭 (昭26 学法)
金壹千円也	久保田博之 (昭25 学法)	金壹千円也	中西 隆雄 (昭7 大法)
金壹千円也	井上 馨 (昭27 学商)	金壹千円也	長谷川 隆 (昭25 専商)

金壹千円也	松田 正明 (昭25 学法)
金壹千円也	高木 一郎 (昭27 学法)
金壹千円也	岡田 敏穂 (昭25 学経)
金壹千円也	中川貫一郎 (昭12 大法)
金壹千円也	溝淵 直政 (昭7 専法)
金壹千円也	森 正十之 (昭26 学政)
金壹千円也	長田 千里 (昭27 学法)
金壹千円也	平井 治 (昭27 学法)
金壹千円也	片岡 国江 (昭27 学商)
金壹千円也	鈴木友一郎 (昭17 専商)
金七百円也	雨宮 正男 (昭14 大法)
金七百円也	中山多三郎 (昭25 学法)
金七百円也	森生 博 (昭27 学法)
金五百円也	村田和三郎 (昭25 専商)
金五百円也	塔本 幸司 (昭14 専商)
金五百円也	福中 安夫 (昭27 短大)
金五百円也	宮崎 修 (昭16 関甲)
金五百円也	奥村豊三郎 (昭5 専法)
金五百円也	池田 正 (昭19 専経)
金五百円也	山本 達雄 (昭29 学経)
金五百円也	吉村 健三 (昭26 専経)
金五百円也	武輪 好夫 (昭9 専法)
金五百円也	赤井 末政 (昭6 学法)
金五百円也	東門 徹 (昭24 専商)
金五百円也	池田 稔 (昭26 学経)

累計金七拾壹万七千參百五拾円也	口、昭八会	山内喜一郎
金五千円也	木下 忠 夫	
金參千円也	累計金貳拾五万四千円也	
八、祥久会	金參千円也	岡 正 阿 作
計金參千円也	計金四拾五万円也	
同期金累計	計金貳拾五万四千円也	
金貳百貳拾參万參千參百五拾円也	個人の部	藤 原 亀 夫
金壹千円也	金壹千円也	平 居 安 雄
金壹千円也	計金貳千円也	
個人累計	金五拾參万九千六百円也	
計金參拾五万六千八百円也	校友累計	
金八百六拾壹万五千円也	累計金	
四千壹百五拾貳万貳千壹百四拾九円也	(合計累計は重複申込額を含まない)	
(実寄附金額である)		

謝 辞

去る昭和二十八年十一月より關西大學創立七十周年記念
拡充資金募集に付御寄附を御願申上げました処、各位には
其の趣旨に深き御理解を御示し戴き、御蔭を以て所期の拡
充計画がとどこほりなく完成致しました、此処に謹んで御
礼申下げます。

尚本事業完成に就ては（自昭和二十二年十月
至昭和二十三年六月）の間に募集致
しました關西大學擴張及び校友会館建設資金の御寄附者並
びに昭和二十五年十一月以来、本大學拡充資金の寄附保険
に御契約下さいました各位の御力に負ふ所も大なるものが
あるのでありまして改めて深甚の謝意を表する次第であり
ます。

御援助により完成されました拡充五ヶ年計画完成表を下
の通り御高覧に供しますと共に、併せて今後の学園発展に
も倍旧の御協力を賜りますよう切に御願申上げます。

追而 御寄附は本年度末まで引続き拝受致しております。

昭和三十年十一月四日

關西大學 學長 岩 崎 卯 一
關西大學理事長 白 川 朋 吉

關西大學拡充五ヶ年計画完成表（昭和三十年十月現在）

建 物 名 称	起工年月	完成年月	建 坪	延 坪	構 造
大學ホール並に研究室新築	昭和四・四	昭和七・四	三〇・四	四〇・〇	鉄筋コンクリート造
第一学舎第二期新築工事	昭和八・七	昭和九・四	一六・四	四七・六	瓦葺二階建
〃 第二期 〃	昭和八・七	昭和九・四	一六・四	四七・六	〃 三階建
〃 第三期 〃	昭和九・三	昭和一〇・〇	四五・三	一、三三・〇	鉄骨鉄筋コンクリート造
〃 第三期 〃	昭和九・三	昭和一〇・〇	六六・五	一、〇九・六	三階建、一部四階
圖書館増築工事	昭和九・三	昭和一〇・〇	一五・四	五八・七	〃 二階建一部中二階
第二学舎第一期増築工事	昭和九・三	昭和一〇・〇	二六・三	二八・九	〃 三階建書庫六階建
第一高等学校校舎新築工事	昭和九・三	昭和一〇・二	三三・〇	七五・〇	〃 二階建
〃 講 堂	昭和九・三	昭和一〇・三	一〇・八	一六・八	〃 三階建瓦葺
〃 理科教室	昭和九・三	昭和一〇・九	四〇・〇	四〇・〇	鉄骨造平屋建瓦葺
〃 附属食堂	昭和九・三	昭和一〇・一	一六・〇	一六・〇	木造瓦棒葺平家建
尚志館第一期増築	昭和九・六	昭和一〇・八	一五・四	一五・四	〃 二階建瓦棒葺
〃 第二期 〃	昭和九・八	昭和一〇・八	三・三	四・四	〃 〃
西研究室改造工事	昭和九・二	昭和一〇・二	一六・五	一六・五	木造瓦葺二階建
秀麗寮第一期工事	昭和九・三	昭和一〇・三	八・〇	八・〇	〃 平屋建
〃 第二期 〃	昭和九・三	昭和一〇・九	一五・五	一五・五	〃 〃
〃 第三期 〃	昭和九・三	昭和一〇・九	一五・五	一五・五	〃 〃
幼稚園々舎増改築	昭和九・三	昭和一〇・六	一〇・〇	一〇・〇	木造瓦棒葺二階建
天六学舎増築工事	昭和九・四	昭和一〇・九	七・〇	三七・六	木造瓦葺平屋建
合 計	昭和九・四	昭和一〇・九	二、九五・四	六、三九・三	鉄筋コンクリート造
千里山学舎内道路舗装			九三・〇	九三・〇	地上四階、地下一階建
〃 植 林			七〇・〇	七〇・〇	通路アスファルト
〃 造 園			二、一〇・〇	二、一〇・〇	建物前部コンクリート
					桜百本、紅葉三十本
					芝張り植樹、開墾樹木移植